

北歐三入集



ビヨルンソン

ハムスリン グラデルフ

新潮出版社

非賣品

世界文學全集(27)

北歐三人集

第十九回配本

昭和三年九月五日印刷
昭和三年九月十五日發行

翻譯者

宮原晃一郎
生田春月

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

一八八八八
二〇〇〇〇
四九八七六
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

解 説

(一) ハムスンに就いて

北歐といへば、單に北歐羅巴の意味に取つて、獨逸や、露西亞までも引括^{ひく}める場合もあるが、此處では諸威語、瑞典語ノルヂスクの意味で、單にスカンデナヴィヤ諸國即ち、丁抹、諸威、瑞典、それからアイスランドを含めてのことである。

北歐作家中の巨人はイブセンとストリンドベルイ、それからビョルンソンであるが、これは何れも故人であつて、現存作家の中で、第一流として、その實力からも、又名聲の上からも世界的なのは、この『飢餓』の作者クヌット・ハムスンである。

ハムスは千八百五十九年八月四日諸威グッドブランドスダール縣のロムに生れた。彼の生家はスクルト・バックケン(見晴しが丘?)といふ名のついた、非常に景色の好いところである。彼は此處に美はしい自然の裡にテッサ瀧^{フォッス}の瀟然たる音を聞いて過した。彼の作品の多くが常に自然美に對する嘆賞に費されてゐるのは、この影響を蒙つたものであらう。

彼の父はベーデル・スクルト・バックケンといふ仕立職であつた。クヌットの外に四五人の子供があつたので、家計は次第に困難になつて、子供達は隣り近所の扶助を受けるやうな有様であつた。この子供達のなかで、クヌットは非常な體力と健康の持主で、同時に極めて食欲が旺盛であつた。

然るに千八百六十年、諸威に未曾有な經濟的困難が起つたとき、彼の父は遂に亞米利加移住を思ひ立つたのである。

が、運命はこれをクヌットの後年に實現をゆづり、一家をあげてノルラン地方のハマーロイに移り住ませることになった。然し、それでも亦安住の地を得なかつたものか、父は再び、かの漁業で名高いローフォトン島に移つた。クヌットはそのとき四歳であつた。彼はこの荒涼たる自然のうちに成長して行つた。その後數年間、牧師の伯父のところに寄食してゐた。彼はこの時の生活をその詩趣豊かな筆で、『ノルスク・ファミリイ・ジurnal』に書いてゐる。年を経た教會堂、物寂しい墓場、世離れた宗教家の生活といふやうなものが、この多感な少年の心を動かして、後年の素地をこにつくらしめたのであつた。

十七歳の時、彼はボードオウの靴屋へ弟子にやられたが、文學に志を立てたのは、それ以來のこと、千八百七十七年には小説『謎めくもの』を上梓したが、恐らくこれがハムスの第一作であらう。つゞいて『再會』と題する詩と『ビョルゲル』と名のついた物語が發表された。但し今日では稀觀書である。

靴屋に奉公してゐるうち、彼は職人の身に適しないのを知り、遂に決意して、行方定めぬ放浪の旅に上つた。彼はまづ漁村に行つて、トロール漁船の石炭擔ぎとなつたが、一箇處に長く足を止めることはなかつた。彼はこの間、一度は地方の或る高官の家庭教師になつたこともあれば、又後援者を得て、外國旅行の資金を恵まれたこともあつた。

ハムスが亞米利加に渡つたのは、彼が二十四歳のときで、その目的はユニテリアン派の牧師となるにあつたと云ふが、遂に目的を達することが出来なかつたばかりか、生活に追はれて、あらゆる烈しい労働に従事した爲めに、すっかり體を悪くした。彼は或る夕方ミネアポリスの驛場で、賣り手になつて、大聲に怒鳴つてゐると、急に胸が裂けたやうな心地がして、咯血した。醫師は診察して、奔馬性肺結核で、今後三ヶ月の生命しかないから、若し歸國したいなら、今すぐの方がいと云ふのであつた。

彼は醫師の注意など俟たずに、只無暗に歸國を急いで、旅費のないまゝ、機關車に乗せて貰つて、ニュー・ヨークまで三日の旅をした。ところが驚くべきことには、その間、向ひ風の爲めに強く空氣を肺の中に吹き込まれたので、ニュー・ヨークに着いたときは、もう、さしもの難病も半ば癒えてゐたのだつた。そしていよいよ、諾威に歸つて、更に二三ヶ月休養すると、すっかり健康な體になつたのだつた。これは千八百八十五年のことである。

健康になつた彼は、此處に年來の志望である文學に専念して、まづ二三の小話や、亞米利加文學觀や、『罪』と題する小品などを發表した以外に、文學巡回講演を試み、ヒエランヤストリンドベルイについて、諧謔と機智とに富んだ話で聽衆を悦ばした。

千八百八十六年の秋、彼は再び亞米利加に渡つて、ビュルンソン、イブセン、ヒエラン、ガルボル、リエなどについて講演をして廻つた。彼はその批判の方法ではブランドスに、その主張ではビュルンソンに學ぶところがあつた。

歸國後、彼は『近代亞米利加の思想界』といふ長い論文を發表したが、これによると、ハムスンの米國に對する感想は甚だ面白からぬものであることが窺はれる。しかし彼は後に至つてこの書を絶版にした。

『飢ゑ』の斷篇が發表されたのも此頃(千八百九十年)で、之を載せた丁抹の雜誌『新土』は間もなく廢刊してしまつた。

彼はやがて巴里に行つて、アルベルト・ランゲンを知り、その手で、初めて『飢ゑ』が本となつて、諾威で出版されることゝなつた。文壇に於けるハムスンの位置は此處に動かし難きものとなつた。その後の彼の名聲は年と共に高まつて、小説、詩、劇と數多くの作を出したが、千八百九十八年、グリムスタードとアレンドールとの間にあるニョルンホルムに土地を求めて、これに住ひ、半ば農民のやうな生活をしたが、夢想と創作とに耽つてゐた。

X

ハムスンの作品を一覽すると、よく彼の生活と一致してゐることが分る。彼は言葉の至上の意味での「私小説」家である。勿論、劇作もやはりハムスン自身の反映ではあるが、小説に於て顯はれる彼自身の姿こそはより、鮮かである。例へば『飢ゑ』は彼の失意、焦慮の極、今日の食にも困つてゐながら、どこまでも文學に功名を立てようともがいてゐた時代を表明し、『神祕』、『牧羊神』、『ヴィクトリヤ』、『陶醉』等は彼の漂泊時代を反映してゐる。

ハムスンの諸作を通じて流れる精神はロマンチックである。『飢ゑ』の如きは、痛ましい、血の滲み出る現實で、生か死かの境目に立つ人間の尊い體驗記録であるけれども、そのリアリスチックな描寫の間に、途方もない空想が雜へられ、或は自分は今餓死するほどの境遇にありながらも、他人の窮乏に同情して、金品を恵んだり、困りきつた揚句、つまらぬ不正を試みるが、すぐ良心に責められて、その償ひをしたり、或は又故なく他の恵みを受けることを屑しとせず、折角厚意をもつて贈られた金をむざ／＼他人にやつてしまふといふやうな、人道主義的、理想主義的なところが澤山に入つてゐる。若しロマンチックとけ主として空想的なものゝ謂ひであるならば、彼をさしてロマンチケルと呼んでも決して間違ひはない。

ハムスンは又、北歐のドストエフスキイと呼ばれる。がしかし、ハムスンにはドストエフスキイの宗教的空氣がない。ユニテリアンの牧師とならうとした彼と、正教の素朴、單純な、最も善いところを多くもつたゾシマ長老を創造したドストエフスキイとの間には、よしや等しく宗教的であるとしても、非常に大きな開きのあることは明かである。然し、その人道的氣魄に於て、又その貧者の生活を克明に、同情を以て描いた點に於て（特にこの『飢ゑ』に於て）、彼は北歐のドストエフスキイと呼んでも差支はないであらう。

彼の作品の、も一つの特異點は、その浮浪人生活の描寫であらう。尤もゴリキイのそれとは餘程趣きを異にしてゐる。

るが、彼の大多數の作には浮浪兒が出てくる。現に、この四五ヶ年間の作品を見ても、浮浪者の出てゐないのではない。
『野の發展』でも、『井戸端の女』でも、『絶筆』でもさうである。最近の『漂浪者』(小説)に至つては、名からして彼の浮浪癖を示してゐる。

數多いハムスンの作は皆それ／＼の趣きを具へて、尊敬すべきものであるが、中でもこの『飢ゑ』は一頭地を抜いてゐる。ハムスンがノーベル賞を受けたのは千九百十七年に出した小説『野の發展』の爲めであるが、私から見れば、『飢ゑ』はその紙數も遙かに尠ないけれど、緊張と力と、その出來榮えの見事さに於て、その特色の著しさに於て、寧ろ『野の發展』の上にあるものではないかと思はれる。實際、貧者の飢ゑを描いて、これほどまで徹底したものは世界に二つとはない。『ヘンリー・ライクロフトの手記』の如きがあるけれど、それにはなほ多くの餘裕が生活のうちに見出されて、とても『飢ゑ』とは比較にならないのである。私は『飢ゑ』を以てハムスンの最大傑作となすばかりでなく、北歐文學(小説)中の最大收穫、世界の文學中でも、第一位に推さるべきものと信じてゐる。

最後に、ハムスンの文體は決して明快、的確とは言へない。諾威で文章の規範となるのはイブセンとビョルンソンであるが、ハムスンの文章は時としては諾威人にも意味を十分にとり兼ねるところがある。従つて英譯、獨譯共にそれぞれ解釋を異にする場合がいくらもある。殊に會話と地の文との關係が極めてあやふやであつて、會話を三人稱にして間接語法で記述しながら、なほ會話の語勢をそのままに残してゐるのは頗る奇怪で、それが特にこの『飢ゑ』には多いから、譯する際に非常に困難を感じた。しかしその風變りなところに、ハムスンの面白味が多分にあるのだから、餘りに敷衍し過ぎて説明的に流れても、味がなくなるので、出來る限り解し易く譯しては置いたが、又この程度ならば解るだらうと思ふところは、そのままに残して置いた。豫め讀者の御諒解を願つて置く。(宮原晃一郎)

(二) ビョルンソンに就いて

「或日、家へ歸つてくると、自分の部屋にビョルンソンが來てゐた。」とストリンドベルイは、その『魂の發展史』の中で、ビョルンソンを描いてゐる。「ヨハン」はビョルンソンの肖像を二枚見た事がある。一は若い時分で、『シンネエヴェ』を書いた時である。もう一枚はもつと後のであつた。前のは體格の大きな、立派な男振りで、眞黒な一杯の髯に、口の周圍には憂鬱な諾威風な特徴を備へてゐた。後者は獅子の鬣たてがみのやうな大きな頭をして、二の目が大きな眼鏡の後に射らばかりに輝き、若い男の髭位もありさうな眉毛をしてゐた。……丁度今こゝで午後の薄暗い光の中に、ソファに頗る巖丈さうな體格ではあるが、外見はさう特に變つた風も見えない男が腰かけてゐるのを見た。」と言ひ、「ビョルンソンが笑ふと、もう使ひへられた短い危げのない二列の齒が見えた。それは子供の乳齒を想はせた。」とも書いてゐる。(秦豐吉氏の譯による)

これがビョルンソンの外貌である。この外貌の下には、どんな精神が潜ひそんでゐるのであらうか。

ビョルンスティエルネ・ビョルンソン(1832—1910)は、生前、ヘンリック・イブセンと對立し、又併稱された大作家である。イブセンとは、青年時代から、或時は敵として、或時は友として、相角逐かくかくし、相拮抗ひきあひして行つた。それで丁抹の大批評家ブランデスも、「イブセンとビョルンソンとは、諾威古代の二人の王シグウルとエスタインに比せらるべきである」と云つてゐる。「一は故郷に止まつて、祖國の開發のために働いた王であり、一は他國へ出て行つて、大膽な冒險によつて、祖國の名譽を高からしめた王である。そして、イブセンが國境を越えて、國際的に働いたエスタインならば、諾威の國民的作家として、祖國の啓蒙のために働いたビョルンソンは、自らその戯曲に描いたシグウルその人でなければならぬ。

原书缺页

原书缺页

の簡潔な筆致を賞揚して、最も北歐古譚（サガ）の體を得たものだと言つてゐる。全く、ビオルンソンの文體は、暗示的で、印象的で、簡潔を極めてゐる。少しも修辭に墮したところがない、文章を飾つたところがない。反復をいとひ、餘計な説明を避ける。そのため、時には、我々日本の讀者には、一寸納得の出來ぬ場合もないではない。例へば、『ソルバッケン』の第二章のところに、トルビオルンが、日向丘に遊びに行くところがあるが、あそこなども、遊びに行つたといふ事を書かないで置いて、いきなり、シンネエヴェとトルビオルンとの會話を出して、その事を知らせてゐるなど、その一例だ。かうした簡潔な文體は、サガに學んだものであるが、一面から云ふと、そこに取扱はれた農民の寡黙な性質、簡単な物の言ひ方に影響せられてゐる點もあつて、一種の印象主義と、サガの體とが、自然に融合一致してゐる譯だ。

そして、そこに描かれた生活と、作者の思想とは、飽くまで健全で、純潔で、光明的である。そこには強い信仰がある。そして、その人物の鮮かさ。「ビオルンソンの少年少女は、その青春と戀愛との描寫は、世界文學中でも、最も特異な創造である。ビオルンソンほど、純潔な處女の戀を美しく描き得たものはない」と、ワルテル・フォン・モロの云つた言葉は眞實である。思ふに、この二作は、理由なくして、世界文學中の傑作の中に伍してはゐないのである。

ビオルンソンの制作は、大體、二つの時期に分けられる。その處女作を出した時分から、劇場監督となつて、盛んに筆を執つた後、三十七歳、一時筆を絶つまでと、外國に遊んだり、コペンハーゲンから出てゐる雑誌の編輯者となつたりして數年を過した後、再び筆を執り出した後年との二つである。そして、この前の時期は、小説では農民小説、劇では歴史劇の時代で、劇では主に北歐古譚（サガ）から材を得て書いたが、小説の方でも、現代を取扱つたとは云へ、舊習に囚はれた農民生活を描いてゐるので、近代的の氣分はなく、内容も形式も、ともにロマンティックであつた。また、『ソルバッケン』や、『アルネ』に見られるやうに、澤山の詩を小説の中に挿入するところなども、いかにも獨逸のロ

マンテック派の詩人の小説を思ひ出させる。

この前期の作品の主なもの、小説では『シンネエヴェ・ソルバックン』(一八五七年)『アルネ』(一八五八年)『快活な青年』(一八五九年)『漁夫の娘』(一八六八年)等。戯曲では、『兩戦の間』(一八五七年)『シグウル』(一八六二年)『マリ・ア・ステュアート』(一八六四年)『新夫婦』(一八六五年)等である。

後期のビョルンソンは、サガの體を離れ、農民生活を離れて、近代の題材と近代の様式とを得て來た。その精神に於いても、牧師的な傾向から、戦士の傾向に移つて來た。小説では『マゲンヒルド』(一八七七年)『カビテン・マンサナ』(一八七九年)『塵埃』(一八八二年)『旗は市と港にひるがへる』(一八八四年)『神の道』(一八八九年)『アブサロンの髪』(一八九三年)『マリイ』(一九〇六年)等。戯曲では、『編輯者』(一八七五年)『破産』(一八七六年)『王』(一八七七年)『新しきシステム』(一八七九年)『手套』(一八八三年)『人力以上』(第一部一八八三年、第二部一八九五年)『地理と戀愛』(一八八五年)『パウ・ランゲとドラ・パルスベエル』(一八八八年)『ラボレムス』(一九〇一年)『若き葡萄の花咲くとき』(一九〇九年)等がある。

一體、ビョルンとは、諸威語で熊の義であるが、名にも姓にも熊の字がついてゐるビョルンソンは、幾分毛むくぢやらない熊のやうなところがある。素朴で、正直で、不器用で、徹底的の田舎者で、また喧嘩癖をもつてゐる。その争鬭癖が、この期間に於いて、彼を戦士として活動せしめ、政治の領域でも大いに働かせた。或ひは世界の平和運動のために、或ひは露西亞との通商に便なる無凍港のために、政論家としても働いた。一方、社會劇の方に進出して、イブセンと角逐せんとしたのもこの期間である。

『手套』はまたこの期間に於けるビョルンソンの活動の一面を代表する。兩性問題に専心し、情慾の問題の解決に熱中

した一種の清教徒たるビョルンソンの、所謂スワウ運動なるものゝ核心がこゝに出てゐる。結婚する場合、男子が女子に求める貞潔を、女子もまた男子に求めんとするこの女主人公スワウの要求は、女性が極度に奴隸的地位にある我が日本では、むしろ奇異に感ぜられるものがあるかも知れない。が、こゝでは我々は北歐人特有の厳格な倫理觀念を考慮しなければならぬ。ビョルンソンの最後の作は、『若き葡萄の花咲くとき』である、これはその一生の自己清算であり、エピソードである點で、しばしばイブセンの『我等死者目覺むるとき』(蘇生の日)と比較論評されるものである。

一九一〇年の四月、この巨人は、その愛してゐる故國のアウレストアドの別荘ではなく、外遊中巴里で、卒中で死んだ。四年早く生れたイブセンよりも四年遅れて。つまり、イブセンとビョルンソンとは、丁度同じ年で死んでゐるのである。

(三) ラゲルレフに就いて

セルマ・ラゲルレフ(1859—)は、現存の人で、今年七十歳である。三十二歳迄は、全く無名の人であつた。瑞典の片田舎の女教師が、世界的名聲を馳せて、ノーベル賞の受賞者にならうとは、當時誰も思つたものはなかつたであらう。

ラゲルレフは、一八五八年、フリユクスタアルのモオルバックに生れた。その土地のあるウェルムランドの地方は、一年の大半は雪と氷に閉されて、道はとてもわるく、交通は不便であつた。瑞典の他の土地とは一寸切り離されたやうな有様で、たゞ夏のわずかな間だけ、他處から人が入つて来るだけである。そんな狭い土地で、彼女は二十二歳まで靜かに暮して、それまで誰も描き出した事のなかつたその土地の人情風俗、風變りな人物や性格を観察し、心に印象したのであつた。

ラゲルレフの履歴は、極めて簡單である。別に取り立てゝ言ふほどの事もない。一八八〇年に、ストックホルムに行つて、その女子高等師範に入り、一八八五年に、地方の一都市ランヅクロナの女學校の教師となつて、十年間、その職にあつた。この平凡な一女教師を、一躍世界的名聲の持主としたのは、彼女の處女作『ゲスタ・ベルリング譚』であつた。

一八九〇年に、ストックホルムの婦人新聞『イドゥン』が、約百頁ほどの小説を懸賞募集した。ラゲルレフは、それに應募して、『ゲスタ・ベルリング譚』の最初の斷片を送つた。これが後にあんなにも愛され、尊重されて、瑞典ばかりでなく、世界中にその名をつたへられた作物の成立つた動機であつた。彼女はこの成立ちの次第を、『ゲスタ・ベルリング譚』の作られた事情といふ自叙傳的な文中に詳述してゐる。

この『ゲスタ・ベルリング譚』は、ビョルンソンに於いて著しかつた北歐古譚(サガ)の調子が、更に徹底的に用ゐられて、その物語自身が新しいサガとなつたものである。ラゲルレフ自身の言葉によると、その幼時や、少女の時分から、いろ／＼の傳説や口碑が、自分のまはりで物語られてゐたので、それらが故郷の自然と相交錯して、深く頭に刻み付けられてゐたから、後年、ストックホルムの街を歩いてゐた時、それらの故郷のサガを、この故郷の風景と共に、一つの物語に書いてみたいといふ考へが浮んで來たのだといふ。そこで、懸賞小説に應募して當選した作品を更に書き足して、五百頁の大小説とし、茲にはじめてその多年の夢想を實現し、古いウェルムランドのサガを完成したのであつた。

この作は近代には稀らしい散文の叙事詩ともいふべきもので、その主人公ゲスタ・ベルリングは、片田舎の牧師であるが、世事に疎い、情熱的な奔放な男で、詩を作らぬ詩人である。瑞典の天才的な詩人アルムキストが、幾分そのモデルとなつてゐると云はれてゐるが、ラゲルレフが、アルムキストの小説『茨の書』を、ビョルンソンの小説とゝもに

愛讀してゐたと云へば、多少肯^{うかう}かれる點もないではない。大抵の女流作家は、その作中の男主人公に戀着してゐると云はれるが、ラゲルレフにあつても、ゲスタ・ペルリングは、彼女の戀人であつた。それほど深い愛を以て、魅力ある性格に造り上げられてゐるのである。ゲスタの周圍には、種々様々の風變りな、面白い人物が澤山ゐて、いろんな突飛な事件を捲き起す。まるで古傳説を読むやうな興趣を持つてゐる。

かうした特色は、ラゲルレフの作品全部を通じて一貫してゐる。次いで出た短篇集『目に見えぬ紐』より、ずつと後年の作、『ニルスの不思議な旅』に至るまで。

ラゲルレフは、一八九五年、その教職をなげうつて、純粹に作家として立つた。そして、瑞典王室から旅行手當を受けて、やゝ長く、獨逸、瑞西、伊太利に遊び、シシリヤを舞臺とした『反基督の奇蹟』(一八九七年)を書き上げた。『ゲスタ』とは反對に、これは南方の情熱の讃歌である。一八九九年には、埃及、パレスティナに遊んで、後に、ダラネの農夫の宗教的覺醒を取扱つた大作『エルサレム』を完成した。その他、著名の作品は、『アルネ氏の寶』『リリエクロナの故郷』『ヤンの郷愁』『死の馭者』『聖なる生涯』『基督の傳説』『一片の生活史』等である。

然し、それらの中で、こゝに譯出された『地主の家の物語』は、疑ひもなく、傑作である。恐らくラゲルレフの書いた最良の物語の一つであらう。獨逸の作家トマス・マンは、この作を評して、その主人公の狂氣の描寫が、毫も空虚なこしらへものでなく、臨床醫學的研究にもとづいた眞實性を有つてゐる事と、女主人公の理性の力と勇敢さが、いかにも素直に描破されてゐる事とを賞讃してゐる。また、批評家ポリツキイは、その構想の巧妙な點、『ゲスタ・ペルリング』にありあまつてゐた抒情的の感嘆や、筆辭の無くなつてゐる點を指摘して、彼女の才能の最も圓熟した頂點を示すものと評してゐる。

ラゲルレフは、もと／＼傳説の世界から出發した人であるだけに、非常にロマンティックで、さうした要素に富んでゐる點は、ビュルンソンよりも更に顯著である。それゆゑ、彼女の傳記者である瑞典の批評家、オスカアル・レヴェルティンは、「セルマ・ラゲルレフは近代文學の最も驚異すべき破格である」と評してゐる。それゆゑ、この『地主の家の物語』に於いても、狂氣、假死、幻想、透視、その他の超絶的な、自然の祕密が、重要な動機となつてゐる。第一、この女主人公のイングリッドは、いつも夢の世界に生きてゐるやうな、非常に幻想的な、幾分透視的能力を持つた女で、幻の人と現實の人が、始終ごつちやになつてゐる。憂愁夫人といふ蝙蝠の化身のやうな幻想上の人物が、彼女の心の眼にあらはれてくる場面など、まるで近隣の地主の夫人が訪問でもして來たかのやうに、極めて自然に、當然事のやうに描き出されてゐる。その現實と幻想とが別に繼目も見えぬ位に移動して行く。作者の物語の才能は天稟と云はなければならぬ。

『沼の家の娘』は短篇集『一片の生活史』中最も長いもので、最傑作と云はれてゐるものである。我々日本人に取つては、或ひは『地主の家の物語』よりも一層深い興趣があるかも知れない。猷身的な女主人公の愛情は、涙ぐましい程のもので、義理人情の幾微にふれると、ついほろりとしやすい日本人の性情にとつては、何と云つても、深く心に沁みるものがある。日本的と言ひたいところはそこである。特に、作者が婦人であるだけに、さすがに女性心理の描寫は、男性の作家の及び難いものがある。デリケートで、よくその微妙なニュアンスを寫し得てゐると思ふ。

附 言

終りに譯者として一言すれば、正確と平明とを併せ得べく、最善の努力はしたつもりであるが、何分力の足りない